風景構成法におけるアイテムの空間構成プロセス

アイテムの描画位置と大きさの検討

○大場麗・佐々木玲仁

(九州大学人間環境学研究院)

キーワード: 風景構成法, 構成プロセス, 描画空間

The constructing process of the constellation by the items on the landscape montage technique

Urara OBA, Reiji SASAKI

(Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University)

Key Words: Landscape montage technique, constructing process, drawing space

目 的

本研究では, 風景構成法の描画プロセスにおいて, アイテムがどのように配置され, 描画空間が構成されていく傾向があるのかということを探索的に検討する。

風景構成法の空間構成に関しては, 中井(1971)が「シンタグマ指向的」とであると指摘しており, 描画空間全体の構成を見つつ, 個々のアイテムを描画していくことが風景構成法の特徴であると述べている。また, 風景構成法のプロセス性に関して, 皆藤(1994)は「構成プロセスは風景構成法における最も独創的な特性」と述べており, 佐々木(2012)は「風景構成法にとってプロセス性が重要である」と指摘している。

佐々木(2012)が, 風景構成法の技法そのものを研究することで「技法の潜在的な力がより引き出される可能性がある」と述べているが, 以上にあげた風景構成法独自の特徴が, どのように描画表現に反映されるのかを検討することで, 風景構成法の技法上の性質がより明確になる可能性が考えられる。これまで, 風景構成法の空間構成を描画プロセスの視点と合わせて検討した研究は蓄積されておらず, 研究の意義があると考えられる。

方 法

調査協力者(描き手):九州地方に住む大学生32名(男性13名, 女性19名, 平均20.63歳, 標準偏差1.76歳)を対象とした。

見守り手:第一著者が担当した(当時23歳女性)。

施行:風景構成法を個別法で実施。A4用紙を使用。

分析手順:描画空間上のアイテムの構成を分析するにあたり, 描画アイテムの大きさや位置に着目する。大きさの指標は, 横置きを描画用紙を115×81に分割し(1区画約2.5m×2.5mm), 用紙中心に原点, 横方向にx軸, 縦方向にy軸を設け, アイテム占有範囲の区画数を総区画数(9315)で割った「占有率」を用いる。位置の指標は, 上述の座標系におけるアイテム占有範囲の「重心」を計測して用いる。また, 風景構成法のプロセス性を反映させるため, その時点で描かれているアイテムの総和を計測した「積算占有率」「積算重心」という指標を算出した(例:「田」描画時→川+山+田の占有率と重心)。さらに, 積算重心においては原点からの距離を算出し, それを「積算重心偏位」とした(単位:用紙中央と角を結んだ距離を1として標準化)。なお積算重心偏位が0に近づくほど, 描画空間上のアイテム配置の偏りが小さいことを表す。

結 果

積算占有率の結果から(図1), 終了時には描画空間の約60%をアイテムが占め, そのアイテムの約半分が川・山アイテムによるものであるという傾向がみられた。

積算重心偏位の結果から(図2), 構成の初期段階, 特

図2 積算重心偏位の遷移

図3 各群の積算重心偏位

考 察

積算占有率の結果から, 描画空間の約「3:3:4」の割合で, 「川・山アイテム:その他のアイテム:余白」という構成になる傾向があると考えられる。大景群で空間構成が概ね決まると言われてきたが(中井, 1992 年), 面積という二次元的な構成に関しては, 特に山アイテムまでの構成プロセスの影響が大きいということが実証的に示された。

積算重心偏位の群分けより, 描き手の40.6%が含まれる群(A群)が抽出できた。A群は, 川の描画で一旦は描画空間が偏るが, 山を描くことで描画空間の偏りが減少するという構成プロセスを経る群で, 風景構成法において現れやすい描画プロセスであることが推測できる。B群は, A群とは対照的に, 川を用紙の中央付近に描画し, 次に山を描画することで空間上の偏りが大きくなるプロセスを経る傾向がみられる。初めの川は描画空間が偏らないよう慎重に描画し, 描画位置が比較的決めやすいと考えられる山は大きく描画している傾向がみられる。C群は, 全構成プロセスを通して, アイテムの配置が描画空間上大きく偏ることのない群である。空間構成に関してはアイテムの配置を大きく偏らせることのないよう「無難に」描画した描き手が多いのではないかと推測できる。

本研究では, どの群にも分類できなかった描き手が7名いたが, 約78%の描き手がいずれかの群に分類でき, 風景構成法の描かれていくプロセスの中での描画空間の構成には傾向があることが推測できた。さらに, その傾向には描き手の特性が反映される可能性が考えられた。群間の差異に関して, 見守り手の要因や実験状況など, 今後より包括的に考察することで, 風景構成法の性質がより明確になると考えられる。

引用文献

- 皆藤章(1994). 風景構成法 その基礎と実践 誠信書房
中井久夫(1971). 描画をとおしてみた精神障害者 とくに精神分裂病者における心理的空間の構造 芸術療法, 3, 37-51
中井久夫(1992). 風景構成法. 精神科治療学, 7(3), 237-248.
佐々木玲仁(2012). 風景構成法のしくみ 心理臨床の実践知をこころに 創元社

図1 積算占有率の遷移